

たものだ。

わたくしは、恐ろしい戦争、その本当のことを伝え、今日の平和は、そのどうどい体験の上にきずかれたことを知らせ、平和がいつまでも続くようにいのるものである。

（海部郡七宝町在住）

思わず「ナムアミダブ、ナムアミダブ」

鬼 頭 忠 男

ドカーン。

腹わたがよじれるような大音響^{おんきょう}で目がさめた。窓ガラスがうす赤く明るい。飛行機の爆音^{ばくおん}がする。空襲だ。急いで弟たちをゆり起こす。時計を見ると二十二時だった。毎晩のように鳴り響く警報^{けいぽう}のサイレンで、すっかりすい眠不足になっていたのか、空襲警報も知らずに眠っていた。ヨリにもよつて最悪の時にねむりこんでしまったのだ。

急いで身じたくをする。ゲートルをまく手がふるえてうまくまけない。母は幼い弟たちをせきたてている。私は、玄関の防空壕に走り、食料品や日用品をほうりこんでふたをし、土をかけた。母が来て、



「まだ入れる物があるのに。」

と、ぶつぶつ言っている。大事にしていた本やアルバムを入れた本箱は入れることができなかつた。

ザアー。トタン屋根に降る夕立のような音。
弾だんの落下だ。思わず軒下のきにはいつくばる。油脂ゆし焼夷しょうい弾がはれつしたのだ。飛び散つた油脂が、ところかまわづひつついで、そこで炎を出してちよろちよろ燃え出す。地面で燃えているのは水をかけたり土をかけたりして消す。しかし、壁や柱の上方で燃えているのは手が届かず、どうすることもできない。母や弟を避難させ、わたしは、もう少しがんばつてみようと思つたが、西の四日市倉庫が燃え出した。これでは逃げ道がなくなつてしまふ。どうどうあきらめて母や弟たちの後を追つた。

線路ばたまで來たが、向こう側は煙で何も見えない。母たちの姿も見えない。逃げる人々に混じつて北へ走つた。人々は、暗い方へ暗い方へと流れてい

く。やがて日光川の土手に出た。走ってきた方をふり返って見ると、炎と煙で何も見えない。行く手の宮後や一色の方にも火の手が上がっている。もうこれ以上進めなくなってしまった。

頭上ではひつきりなしにB29の爆音がする。またもや焼夷弾の落下音。土手にへばりつく。目と耳とをおさえる。少しでも低い所、くぼんだ所をさがす。いつそモグラになつて土の中へもぐりこんでしまいたい。

ザアー、夕立の降るような音。ヒュル、ヒュル、ばらばらになつて六角柱の焼夷弾の落ちる音だ。あれが頭の上にきたらおしまいだ。思わず、

「ナムアミダブ、ナムアミダブ」

と、口からねんぶつが飛び出す。

バーン、さく裂音。ふせている背中にどさつとなにか落ちてきた。ああ、もうだめだ。いよいよ死ぬんだ。首にもそれが降りかかる。冷たいどろどろしたものだ。それは、土手の向こう側の水田のどろ土だった。急いで、持っていたバケツに川の水をくんで頭からかぶる。近くにふせていた人にもかけてやる。こうして衣服をぬらしておけば火の粉を防げるだろう。何度もそれをくり返す。

川の水面を火が流れていく。火のついた木片が炎をあげて流れ去る。大きなもの小さなもの、また炎だけのもの。火のついた油脂が流れてくるのだ。ちょうどお盆の精霊流しのように上流からどんどん流れてくる。その火の中を、しゃばしゃば水をけたてて馬がやつてくる。どこかの馬

小屋から逃げだしたのだろう。口からあわをふき、必死にもがきながら下流に向かっていく。大きく見開いたその目は、流れる炎に反射して赤くギラギラ輝いていた。

空を見上げると、真赤な煙でおおわれている。そのすき間にB29のつばさが見える。赤くキラキラ照りかがやいている。見たこともない大きくなつばさだ。超低空でせん回しているのだ。いつもは飛行機雲を引きながら、小鳥のように小さく見えるのだが、今夜は、大鷲のようにおそいかつてくる。むらむらっと敵がい心がわいてくる。武器がほしくてたまらない、どうせ死ぬなら一発でもうつてやりたい。なんの反撃もせず、ただ敵の傍若無人(ほうじやくぶじん)（人まえをはばかりず勝手）(気ままにふるまうこと)にまかせ、土手にふせて死を待つのがくやしくてたまらない。

ますます爆撃が激しくなつてくる。何度もどろ土をかぶつた。そのたびに、もう終わりだ、もうおしまいだと心に決める。死が確実に目前にせまつてくる。今田んぼに落ちている焼夷弾、次の焼夷弾が少しそれで頭上へきたらそれで万事終わりだ。そう思うと、もう爆音もさく裂音も耳に入らなくなつた。

過ぎ去った今までのことが走馬燈のようになつて浮かんでくる。肉親の顔、友だちの顔、浮かんでは消えていく。みな死ぬんだ、少し早いかおそいかだけなんだ。

先月の九日の動員工場の爆撃で死んだ友だちの顔が浮かんできた。「おい、バラよ（彼のあだ名）待つとれ、おれもすぐ行くよ。」彼の顔がほほえみながら消えていく。

まだおれは生きている。今できることは、過去を思い出すことだけだ。もつとたくさん思い出

しておこう。そう思うと気があせつてくる。これが生への執着なのだろうか。今度はむしょうに生きたくなつて胸苦しくなる。「早く終わつてくれ！ B29 よ、もういいだろう。やめてくれ！」とさけびたくなつてくる。落下音を聞いて死をかくごし、さく裂音を聞き、生きることを望む。それを何度も何度もくり返していた。それが永遠に続くようと思われてきた。そして、実はおれはもう死んでしまつて、今、地獄の責め苦に会つているのだとさえ思えてくるのだ。どれほど時間がたつたのだろうか。爆音がしなくなつてからだいぶたつようだ。人々は、それでもただじつと土手にふせている。やがて夜明けが近いのか、あたりがうす明るくなると、やつと人々が起き上がりだした。どの顔もぼう然として、生きているのか死んでいるのかわからない顔だ。

すっかり夜が明けてしまうと、やつと自分は生きていることがはつきりした。母たちのことが心配になつてきたが、どこにいるのかわからない。生きているとは思えない。思わないことにして家の方へ向かつた。助かつた喜びなどみじんもない。ただぼんやりと歩いているだけだった。

(一宮市音羽町在住)